

推しの寝顔を見た。

とある日の放課後。

「くわあああ……」

超人気ユニット、『満月の夜に咲きたい』のボーカルである花房憂花はいま、文芸部の部室で豪快な欠伸をかましていた。

「なんか眠そうだけど、どうしたんだ？」

「昨夜、ちよつとレコーディングが長引いちやってね……だから今日は学校お休みしたらつてマネージャーさんも言ってくれたんだけど、それを理由に休んで、学校と仕事を両立できてないって自分が感じるのが、嫌だったから……だからこうして、無理やり登校したんだけど……ふわあああ、クソねむい……」

「おい、女の子があんまクソとか言うなよ。女の子は汚い言葉を使わない、というオタクっぽい幻想を抱いてる俺がショック受けちゃうだろ」

「そういう訳だから、憂花ちゃんちよつとだけ寝るね？ このあとボイトレあるから、三十分したら起こしてー」

「……いや、そんな忙しいなら、なんでわざわざ文芸部の部室に来たんだよ。ちゃんと家帰って、ふかふかのベッドで仮眠しろって。ここじゃあんま寝れないだろ」

「ぐう……」

「寝れるんかい。しかも、寝る宣言してから数秒で寝れるんかい。お前はのび太くんか何かですか？」

俺のそんなツッコミは、既に入眠してしまった彼女には届かない。——テーブルに突っ伏し、気持ちよさそうに目を閉じる花房。……いちファンでしかない俺の前でこんな、無防備で可愛らしい寝顔を晒すなよな……。

そんなことを思いつつ、ぼんやりと時間を過ごすこと——約三十分。

「ん、そろそろか……おーい、起きろー」

「……………」

「おーい、花房さん？ もう時間だから早く起きろって」

「すう……すう……」

「眠り姫くらい起きねえなこいつ……」

俺は呟きつつ、眠る花房の傍へと歩み寄る。次いで、花房の肩に触れて、そのまま彼女を揺り起こそうとしたけど——。

「……………いいや。推しの肩に触れるとか、キモ過ぎだろ……………」

その事実気づいた俺は、慌てて手を引つ込める。

でも、早く花房を起こしてやらないと、ポイトレに遅刻しちゃうし……………そうも思った俺が「おい、起きろつて」と言いながら、彼女の肩に触ろうとする、やめるを繰り返していたら、ふいに……………「ちっ」という舌打ちの音が、花房の方から聞こえてきた。

「え……………もしかしてお前、もう起きてる？」

「……………ぐー。ぐー」

「あの、急に寢息のクオリティ下がってんですけど……………というか、なんで寝たふりなんかしてんのお前。ポイトレの時間だから早く行けつて」

「光助にちゃんと肩を揺すられるまで起きないぐー」

「な、なんでそんな要求を……………つか、俺と会話ができる時点で起きてるだろお前」

「これは寢言だぐー」

「寢言は寝て言いやがれ」

俺がそうツッコむと、むくり、と突っ伏していたテーブルから体を起こす花房。それから、彼女はどこか胡乱な目つきで俺を睨み、こう言うのだった。

「You are chicken」

「いきなり英語でなんだよ。喧嘩売ってんのか」

「せっかく憂花ちゃんの肩に触れるチャンスをお憂花ちゃんがあげたのに、それをふいにするとか……薄々気づいてたけど、あんたってほんとに根性なしだね。そんなんでいつかわた——女の子と付き合ったりとかできんの？ 大丈夫？」

「よ、余計なお世話だよ……」

「はあ……じゃあ憂花ちゃん、ポイトレ行くから」

花房はそう言いつつ、手早く帰りの支度をして廊下へと向かう。がらら、と部室の扉を横滑りさせたのち、彼女は振り返ると——少し赤らんだ顔で、こう言うのだった。

「……今度また、憂花ちゃんが部室で寝る時は、ちゃんと揺り起こしてよね」

「……………」

「ちよつと。返事は？」

「……………あ、ああ。努力する……」

「ふふつ、あんたらしい返事。——じゃあ、またね」

花房は俺の答えにどこか安心したように笑ったのち、部室から出ていく。

そんな彼女の後ろ姿を見送りつつ、俺は……お前、また機会があったらここで寝る気なのかよと、内心でそうツッコむのだった。